

わが国衛生工学の始祖バルトンの生誕150年を記念する講演会がこのほど東京で開かれた。厳しい環境にあるこの時期に、こうした文化的な試みが企画され成功させたことは上下水道界の底力を示すものであり、改めて学ぶべきことも多かった。

講演会は「W・K・バルトン生誕150年記念事業企画実行委員会」の主催で行われたが、準備に当たっては藤田賢二委員長のもと、同代理の稲場紀久雄氏、監事の坂本弘道氏、事務局幹事長には谷口尚弘氏と、上下水道関係者が一体となって取り組んできた。このことは「わが国近代上下水道の父・バルトン」を顕彰するに相応しく、来賓祝辞も北側一雄国土交通大臣（江藤隆下水道部長代読）、中島正治厚生労働省健康局長から頂いた。

お雇い外国技術者・バルトンの功績は、大学における工学部（衛生工学科）の地位を医学部や法学部と同

じレベルに設置することに貢献し、そのかたわら函館、仙台、東京、横浜、名古屋、

神戸、広島、下関などの上下水道の調査・計画・設計に携わったことである（藤田氏）。衛生工学はイギリス産業革命の影の部分ともいえるべき生活環境の悪化に立ち向かう総合技術（実学）として登場し、それが上下水道の建設にも結びついた（稲場

水道の統合が進んでいるが、その基本精神をバルトンに学ぶことは無駄ではあるまい。

「水道ビジョン」「下水道ビジョン2100」と打ち出されているように、わが国の水道・下水道は今や転換期にある。大きな流れとしては「ハードからソフトへ」ということだろうが、この際、現在に至ったそもその出発点を多面的に振り返ってみるべきだ。その視点の一つとし

た技術者の帰国後の活躍の手下になろう。

バルトンの場合は帰国寸前に東京で病死したので、本国での知名度は低い。それよりも彼の場合は出張先の「途上国・日本」を「よきなく愛し」、日本人女性と結婚して今や玄孫に至るまで画家や音楽家として日本で活躍している。まさに国際人のお手本だ。

バルトンに学ぶこと

氏。

我が国では水道と下水道を切り離して進めてきたので、普及促進などのメリットはあったものの、

の、もともと水道・下水道の根は一つ。「その根っことは、人間を大切にすることだった」と、これは「グア

その点では、上水サイドが遅れをとっている。これを機会に「上水文化研究会」ともいふべき「水道を語る会」を発足させ、ゆくゆくは上水

マチュア写真家・バルトン」を評価した金子隆一氏（写真史家）の講演で教わった。昨今、自治体での水道・下水道「水文化」としての上下水道「なるものを我々の『常識』として持つことは有意義である。「市民に親しまれる水道・下水道の構築」ということから、それは必要だと思っ

お雇い外国人は古代の帰化人と違つて期限がくると帰国した。彼等の多くは本国で知日家・親日家として活躍し、日本文化を先進国に広めた点でも国際化への先陣だった（加藤詔士講師・名大大学院教授）。これなども日本から途上国援助に向いはなからうか。

生誕150年